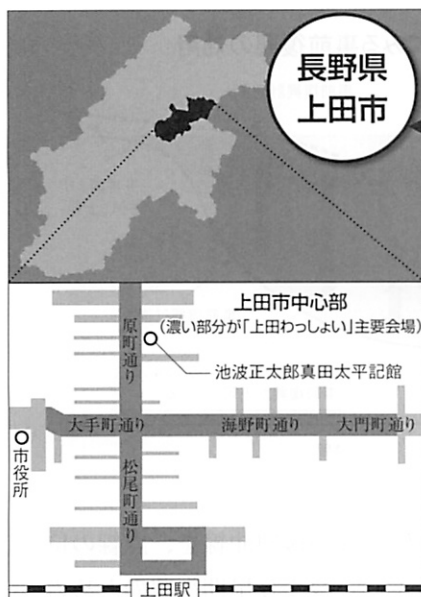




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	住民・旅行者と一緒に踊る祭りの魅力：「上田わっしょい」に見る「連」の可能性：長野県上田市
Author(s)	山村, 高淑
Description	日経グローバル(2013.2.18. No.214)「観光地点検」掲載記事
Citation	日経グローバル, 214, 50-51
Issue Date	2013-02-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52705
Rights	本著作物は、日本経済新聞社の許諾を得て掲載しています。日本経済新聞社の許可なく内容の全部又は一部を複写・転載することを禁じます。
Type	article
File Information	nikkeiglobal214_50.pdf





観光地点検

北海道大学観光学高等研究センター准教授

山村 高淑

住民・旅行者と一緒に踊る祭りの魅力 「上田わっしょい」に見る「連」の可能性

全国には旅行者も地域住民と一緒に踊ることができる祭りがいくつもある。例えば徳島市の「阿波おどり」。事前申し込みの必要がない「にわか連」に当日参加し、有名な連の踊り子から手ほどきを受け、リハーサルを経て演舞場で踊ることができる。服装も自由で阿波おどりを全く知らなくても大丈夫とあって旅行者に好評である。その他にも、高知市の「よさこい祭り」（当日講習を受けて市の「踊り子隊」に参加）や山形市の「花笠まつり」（パレード最後尾の「飛び入りコーナー」に参加）、青森市の「ねぶた祭り」（正装のハネト衣装を着用していればハネトとして参加可能）など、旅行者が地域の祭りに参加して踊ることができるように、各地で様々な方法が用意されている。

こうした祭りの魅力は、単に祭りを見るだけでなく、住民と一緒にになって踊ることで、伝統や熱気を直接体感できる点にあ

る。単なる演出されたイベントに客として参加するのとは比べ物にならない満足感と達成感がそこにはある。さらに言えば、海外からの観光客にとっても、住民の輪に入って踊ることは、ノンバーバル・コミュニケーション（言葉が必要ない交流体験）であり、大きな魅力である。実は日本ほど地域ごとに多様な祭りが息づいている国は世界的にも珍しいと言われる。「踊ることができる祭り」はインバウンド誘致においても極めて強力な吸引力となり得るのだ。

さて、こうした旅行者と一緒に踊ることのできる祭りで、その新たな可能性を示した注目すべき事例がある。長野県上田市の「上田わっしょい」における「サマーウォーズ連」だ。

単に旅行者向けのサービスとして踊りを体験してもらおうという発想ではなく、上田を舞台にした映画『サマーウォーズ』（2009年公開）のファンが全国から年に1度集まり、映画への想いを共有しつつ祭りを盛り上げようという趣旨で「連」が結成されているのだ。

地元高校生が「連」立ち上げ

「上田わっしょい」は72年か

ら毎年開催されている市民祭りで、通常7月の最終土曜日に開催される。参加グループは「連」と呼ばれ、上田市の各自治会や小・中・高校、大学、一般企業や官公庁、有志などで構成されている。そこに09年、地元高校生による「サマーウォーズ連」という新たな連が登場。翌10年からは旅行者の飛び入り可能な連となっている。その経緯は以下のような興味深いものであった。

『サマーウォーズ』は09年8月に全国公開された細田守監督による劇場アニメである。上田市を舞台に、戦国武将の末裔が家族の絆で世界の危機に立ち向かうというストーリーで、幅広い世代から好評を博した。上田市がロケ地であったことから、劇場封切り前から地域側と製作側が共同プロモーションを行っていたのだが、そうした流れの中で「上田わっしょい」の主催者でもある上田青年会議所から製作委員会へ提案されたのが、祭りへの劇中キャラクター「アバター」の登場であった。

劇中で「上田わっしょい」が重要な場面として描かれていることや、祭りの開催日がちょうど映画封切りの直前であること

などがあり、劇中キャラクターを着ぐるみで祭りに登場させ、映画と祭りの双方を盛り上げられないかという趣旨の提案であった。

これに対して製作委員会は、作品イメージを壊さない質の着ぐるみを制作してほしいと回答。青年会議所が地元の高校の美術部に制作を依頼するということで話がまとまった。こうして地元の上田西高校美術部と上田染谷丘高校美術班が着ぐるみを制作。合同で「サマーウォーズ連（アバター連）」を結成し、祭り当日は生徒自らが着ぐるみを身にまとい祭りを盛り上げた。

ファンが飛び入り参加へ

この09年の祭り終了後、翌10年の夏に向け、さらに「サマーウォーズの里・上田」を盛り上げていこうと、地元有志らがつくる「信州上田サマーウォーズ実行委員会」が、全国のファンも加わり一緒に踊れるように、飛び込み連として「サマーウォーズ連」を企画した。もともと上田わっしょいには一般旅行者向けに「飛び込み連」が設定されていたが、主催者である上田青年会議所の協力で、サマーウォーズファン向けの参加窓口が特別に準備されることになった。

こうして翌10年、開催約1カ月前に同連への参加者をインターネットで募集。7月31日の祭り当日には約500人が同

連に参加している。上田わっしょいの連は通常20～30人程度のため、大所帯の「サマーウォーズ連」は大きな注目を浴びた。

なお、続く11年、12年の「上田わっしょい」でも引き続き「サマーウォーズ連」

が組織されているが、2年連続で全国から約250名の参加があり、大いに盛り上がっている。参加者の満足度は非常に高く、リピート率も高いのだ。この作品のテーマが「家族」「里帰り」であることもあり、第二の故郷へ年に一回帰るという気持ちで連へ参加するファンも少なくない。

今後のポイント

阿波踊りや上田わっしょいなどで使われる「連」という語は、元は江戸期に成熟した俳句や狂歌などの同好者集団の名称「連」に由来する。こうした江戸期の同好者集団「連」の構成員「連中」は、年齢や性別、肩書を超えて、趣味・嗜好、価値観を共有し合うことで繋がり合った。そして商業的利益を求めるのではなく、純粋に遊び合う仲間であった。ここに現在の「連」でも変わらない重要な本質がある。特に大好きな作品というコンテンツを共有し、それを共通言語に踊りを楽しむという「サマーウォーズ連」からは



上田わっしょいの「サマーウォーズ連」
(2010年7月31日、上田市秘書課提供)

そうした本質を強く感じることができる。現代の日本社会では「地縁」や「社縁（職場での繋がり）」は以前のようには頼れない。そこで求められているものの1つが、こうした「趣味縁」的な繋がりである。「サマーウォーズ連」で踊ることは、そうした繋がりやネット空間ではなく、現実空間で確かなものとして実感することでもあるのだ。

逆に「祭り」と称しながら、過度に商業化し、一般市民ですら自由に参加できない「祭り」も全国で随分と多くなっている。ビジネスとしては成功かも知れないが、もはやそれは本来の意味での「祭り」ではない。一見、盛況に見えるこうしたイベントも、見学者は一過性の物見遊山客がほとんどで、その地域のファンを生んではいない点にも留意すべきだ。

地域の祭りをどうしたら観光という文脈で生かしていくことができるのか。祭りの持つ本来の機能をしっかりと見ていくと、上田の例が如何に示唆に富むか、良くわかるのである。 **G**